

# 植民地中期における朝鮮社会と知識人たち

## 金基鎮を中心に

李 修京\*

朝鮮植民地時代中期<sup>1)</sup>に、朝鮮プロレタリア文学運動を始めた金基鎮の活動を、本稿では従来の文学運動史からではなく、社会運動史の側面から究明した。金基鎮が日本留学を途中でやめて戻った祖国は、3・1運動後の文化政治の時代であった。わずかではあったが、与えられた政治・文化・社会活動の自由を背景に、多くの知識人が民族の解放、独立への道をそれぞれの分野で模索した。金基鎮はフランスのアンリ・バルビュス、ロシアのツルゲーネフそして日本の小牧近江から学んだ思想を、まず演劇活動、そして文学活動を通じて朝鮮社会に伝播しようとした。PASKYULA, KAPF結成のような文学活動において、金基鎮は政治が文学を包摂することに異を唱え、つねに目の前の大衆に如何にして近代的知識、思想を伝えるか、その方策を見出すことに腐心した。また、金基鎮のもう一つの側面は言論人であった。巨大な植民地権力に対して、合法的に抵抗できる唯一の場所が言論界であった。新聞紙上に、「通俗小説論争」「内容と形式論争」を展開して知識人と大衆の架け橋となりうる文学、思想の確立の必要性を主張し続けた。後に言論界の要職についたが、日中戦争が泥沼化し、日本が国家総動員体制を敷くとともに、親日的言論を余儀なくされた。しかし、金基鎮の辿った軌跡は、植民地下の朝鮮において近代的知識人たらしめとすることの、二重の難しさを身をもって示すと同時に、一般大衆へのまなざしを失わなかったその文学的姿勢は、現代日本における知識人論再考のための、一つの考慮すべき契機となりうるものとする。

キーワード：文化政策，斎藤実，植民地中期，ジャーナリスト，KAPF

### 目次

### はじめに

#### はじめに

#### 第1章 植民地中期の朝鮮社会の実状

- (1) 武断統治から文化政治へ
- (2) 職業の考察と教育の実態
- (3) 言論規制の緩和と思想的動向

#### 第2章 金基鎮の活動

- (1) 金基鎮の文芸活動
- (2) 金基鎮と言論生活

#### おわりに

植民地化された祖国の解放と民族の主体性を取り戻すために、武断統治に対して力で闘う独立運動の動きもあったが、八峰は、知識人を大衆に近づけることで植民地支配下の民族の意識を高め、民族自決へと向かわせようとした啓蒙的教化運動を行ったのである。そして、その目的を達成するために用いたのが‘文学’という武器であった。勿論、後で述べるように既存の芸術至上主義や耽美主義的性質を内包した民族

\* 立命館大学非常勤講師

文学派の動きも台頭するが、八峰は植民地朝鮮の現状からすれば、朝鮮に必要なのはそれらのブルジョアの文学ではなく、プロレタリアの解放を目的とする階級文学を普及させることであると主張し、植民地中期の文壇において革新的な論陣を張ってイニシアチブを取るのである。

しかし、その理論や組織活動は一時的に支持は受けるが、未熟な理論と組織内部の極左的動きとの対立、さらに日本の中国侵略の野望による思想弾圧の激化と同化政策、戦時体制の強化により、それ以上発展することなく挫折していくのである。だが、八峰が行った植民地中期の一連の行動は、いろいろな批判や問題点は残しているものの、一部階級層に局限されていた芸術の大衆化、社会に働きかける知識人の実践的行動の提唱、党派に属さず、芸術、特に文学という総体的な枠組みからの行動の追求、知識人による大衆教化方法の模索、等の点で評価できよう。本稿ではこうした活動の舞台となった社会の実状、あるいは社会的規制が多かった‘植民地’という特殊な状況下でそうした活動を可能にさせた要因を究明したい。

### 第1章 植民地中期の朝鮮社会の実状

本章では、プロレタリア文化運動が台頭する1920年代の総督府の政策を、八峰の活動舞台を確認する意味で分析しておきたい。また、それまでの厳しい武断統治から3・1運動<sup>2)</sup>を経て文化政治へと政策転換した背景ないし意味を、その後の言論・思想活動などの緩和、一定の朝鮮の芸術文化の許容、1920年代後半からの思想弾圧への移行、などの諸点を含めてより具体的に探ってみる。3・1運動の評価、火中の栗を拾うべき新総督の派遣、そして新総督に

よる朝鮮支配政策の緩和の実態を論じて、八峰が活動した時代背景を詳しく検討してみたい。また、当時の朝鮮の総人口からみる就学率、職業別人口統計などを取り上げて、八峰が主唱した文学による大衆の教化、階級文学論、大衆芸術論が有していた社会的必要性を検証したい<sup>3)</sup>。

3・1運動は、緻密に準備された組織的闘争というよりも、むしろ『独立宣言書』に記載されている公約3章の「一切の行動は最も秩序を尊重し、吾人の主張と態度としてはあくまでも光明正大とせしむべし」の項目通り、非暴力的無抵抗の民衆運動<sup>4)</sup>であった。平和的示威行動で独立を要求しようとした基本的性質からわかるように、3・1運動は民族解放闘争としては纏まらず、民衆蜂起の威力が分散する結果となったが、その勢いは日本軍による武力弾圧に対抗して自発的にその規模は拡大し、日本の朝鮮支配政策の再検討して国際社会へ朝鮮の現状を訴えるという成果を得た。そして、新施政による言論や出版の一部認可、社会的規制の緩和が一時的に実現した。それまで発言の場を与えられず抑圧されていた言論や出版をはじめとする文化・思想活動が活発となった。同時に、ロシア革命の余波や米騒動などの影響で社会主義運動や労働運動などが高まっていた日本に留学していた若い知識人達によって新たな思潮が持ち帰られ、民族解放を模索する道筋についても幅広い議論が行われるようになった。八峰もそうした時流の中で活動するのだが、後に八峰が論陣を張った言論や思想的動きがどのような状況であったかを調べるために、言論規制の緩和と思想的動向の項目を設けて、究明してみることとする。

### (1) 武断統治から文化政治へ

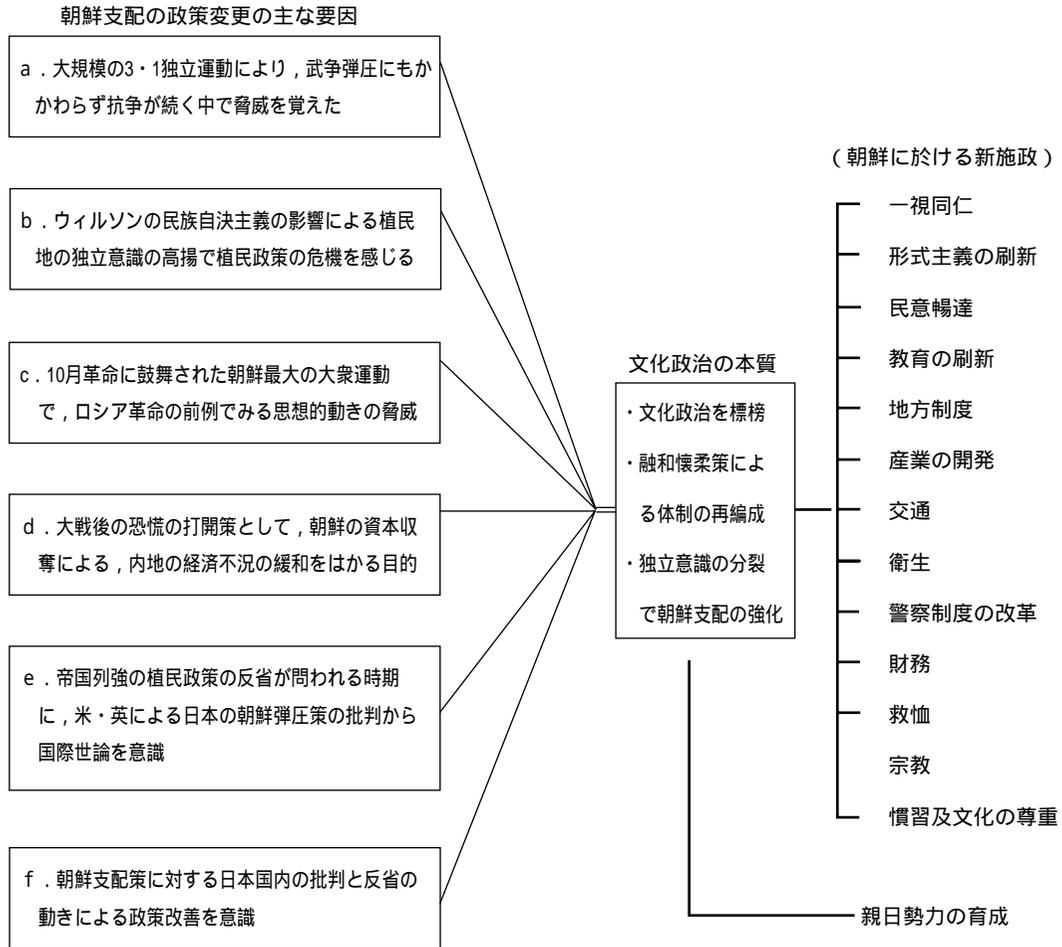
1910年の日韓合併以来行われてきた日本の朝鮮植民地政策そしてそれに伴う近代資本主義の移植から生じる諸問題<sup>5)</sup>は、既存の封建主義体制下で苦しむ朝鮮民衆に対して二重の抑圧を与え、白衣民族の文化的自尊心を奪った。言論や出版、集会などの統制で自分の意思表示がままならなくなった朝鮮民衆の不満は、2・8独立宣言<sup>6)</sup>を導火線として、大規模な民衆運動となった3・1運動へと発展した。3・1運動は、過酷な武断統治への抵抗(=独立の希求)、失われた文化的自尊心の回復、経済的な窮迫からの解放、に端を発したといえるが、金圭煥は「土地調査事業や、その他の改革、および日本商品の流入などによって、従来の朝鮮社会が急速に解体し、そのために‘土地なき民’となった民衆の窮乏が、三・一運動の主要な背景の一つとなった」<sup>7)</sup>と述べて、生活の逼迫から起きた民衆蜂起の面を重視している。実際、3・1運動はインテリ層の主導で始まったが、3月下旬より朝鮮全土に燃え広がった運動の担い手は、農民や労働者<sup>8)</sup>であった。これらの国内的要因に加えて、ロシア革命の影響による中国の国権回復運動やウィルソンの民族自決の原則という外部的な刺激が当時の民族主義者であった李光洙や崔南善、崔麟などの独立意識を高潮させ、抗日的であった高宗の葬式を契機に独立を求める示威運動の実行となった。だが、鎮圧のために日本軍が各地で残忍な虐殺<sup>9)</sup>を行ったため、民衆の晴れない鬱憤は長期にわたる闘争へと拡大した。

しかしその3・1運動を発端として1年以上続いた闘い<sup>10)</sup>の死傷者の数の多さにもかかわらず、実質的目的(=朝鮮民衆による完全独立)は獲得できなかった。徐大肅はこの運動に関し

て「独立宣言文に署名した33人<sup>11)</sup>の指導者のほとんどが集まり、彼らの行動と居場所を自発的に警察に通報して、捕えられた。しかし、この事件は予想に反して日本の圧政によりやくめざめた朝鮮大衆の示威運動を誘発した。」<sup>12)</sup>と、運動の指導者たちのなまぬるい行為を指摘している。また一方では、民衆の力によって3・1運動が広まった<sup>13)</sup>と述べた上、「この蜂起が1920年の政治的改革をもたらしたのは事実であるが、改革は日本人に強要して獲得されたものでも、蜂起指導者たちの要求が容れられた結果でもなかった。それは朝鮮における日本の秩序を回復するための懐柔策として、日本の行政官たちが画策したものである。」<sup>14)</sup>と、その後の政策変化が朝鮮民衆への融和懐柔策であると指摘している。実際、朝鮮民衆の闘いにより、「誰よりも天皇の忠実な支持者でありたい」<sup>15)</sup>と願う原敬首相は、図1で示しているa～fの項目の諸要因から朝鮮植民地の統治政策を見直すようになる。ここでe項目やf項目も文化政治への影響として注目すべきである。大戦後、列強による植民政策の見直しが要求されるなか、日本軍の朝鮮民衆への抑圧にアメリカなど諸外国の批判<sup>16)</sup>そして日本国内における朝鮮支配政策の見直しの声<sup>17)</sup>が高まると、1919年1月に5大國入りを果たして欧米列強に威信を保持しようとする日本政府はそれらを意識せざるを得なかった。従って、朝鮮における残虐な支配に対する日本内外からの批判の声の高まりが、朝鮮支配策の緩和の一要因となったことは無視できないであろう。

原首相は長谷川好道の後任として第3代総督に斉藤実<sup>18)</sup>を抜擢し、官制改正(図1参照)をもって朝鮮支配体制の再編成に臨んだ。斉藤は、高まる民族自決運動の勢いを抑圧かつ分裂

図1．文化政治構図



(注) 施政策の部分だけ，総督府『朝鮮に於ける新施政』1919年，金圭煥論文より再引用。

させて，安定した植民地政策を施行する為に，赴任する一週間前に朝鮮統治に関連する諸官庁の官吏，朝鮮に係る作家，宗教家，言論関係の人々を招いて歓談し，また当時の朝鮮施政の実状と社会状況の報告なども入手して身を構えた。斉藤の覚悟は，京城に着いた初日の爆弾の洗礼に対して，「雨降って地固まるさ」と対応<sup>19)</sup>する表現でも窺えることができる。そして，3・1運動で露呈された植民地支配の難しさは，武断統治だけでは解決不可能と判断して，

文化政治を標榜する斉藤総督の時代が幕を開けるのである。ここで文化政治の‘標榜’と述べたのは，新施政によって，図1の形式主義の刷新では‘教師の帯剣’という威嚇的行為を廃止し，民意暢達をはかる意味で一部の文化的空間の認可や言論，出版などの規制緩和で意思表示の場を設けることが認められ，教育の刷新では，幾つかの学校設立や学校制度を見直して教育の機会を増やし，警察制度の改革では，憲兵警察制度から高等警察制度へと変わり，

慣習及文化の尊重の面では、これまでの朝鮮の慣習や文化の全面的否定を見直していく、という面で確かに表面上の改善策がみられるからである。しかし実質的な差別待遇や文化活動における統制はほとんど変わらない状況であった<sup>20)</sup>。

『東亜日報』『朝鮮日報』『時事新聞』の3つの日刊紙の発行許可や中枢院による朝鮮固有の文化、慣習の調査・研究などの動きはあるが、この雀の涙ほどの譲歩も一時的な宥和策をはかるためにすぎず、治安維持法が公布され、さらに30年代の弾圧期に入るとたちまち再び「朝鮮」を完全否定するようになる。また、これらの新施政は、一視同仁の心で差別を無くすという外面を見せているが、それは同化政策に従順な活動のみを認めるという意味であって、朝鮮民衆の独自の言論活動などにはしばしば強圧的統制が加えられた。従って、他民族支配の困難さを自覚した日本帝国主義が提示した新施政は、本質的には朝鮮支配の再編成による強化に

その目的をおき、朝鮮民衆の抗日意識を分裂・鈍化させるための‘文化’を標榜した短期間の懐柔政策にほかならなかった。他方、斉藤は3・1運動で破壊された親日勢力の育成を重要課題として、官僚や知識人、地主などの各層にわたり親日派を買収および懐柔する政策を行った<sup>21)</sup>。そして文化政策を標榜するかたわら、朝鮮内部の分裂を画策したこの時期は、皮肉にも韓国社会及び文化を近代化へ導く結果となったのであり、八峰らの社会主義文学運動も‘文化政治期’の産物として姿を表したのであった。

## （2）職業の考察と教育の実態

### 職業の考察

米騒動や恐慌の余波による日本国内の経済危機は、植民地資源の搾取へと繋がった。日本は朝鮮を商品市場また日本国内では足りない生産原料の供給地と位置づけ、朝鮮に工業抑圧政策を課す一方、産米増殖計画、綿花増産政策、そし

表1．植民地中期（1925-1935年）の朝鮮の総人口と職業別

項目 年代	総人口	農林及 牧畜業	対総人口比 率（筆者）	小作争議 件数	漁業及 製塩業	工業	商業及 交通業	公務及 自由業
1925年	18,543,326	15,441,290	83%	204	251,496	421,658	1,153,352	422,228
1926年	18,615,033	15,463,774	83%	198	262,983	415,294	1,142,766	420,030
1927年	18,631,494	15,376,401	83%	275	274,400	411,268	1,170,309	418,691
1928年	18,667,334	15,328,152	82%	1,590	284,691	398,257	1,176,873	435,274
1929年	18,784,437	15,371,281	82%	423	288,100	408,215	1,183,586	465,599
1930年	19,685,587	15,853,332	81%	726	312,651	449,262	1,253,895	523,105
1931年	19,710,168	15,740,970	80%	667	306,179	434,880	1,247,619	547,541
1932年	20,037,273	15,954,567	80%	300	263,133	384,951	1,089,227	600,241
1933年	20,205,591	16,079,207	80%	1,975	262,013	431,413	1,226,215	600,360
1934年	20,513,804	16,126,747	79%	7,544	292,431	483,396	1,339,768	629,478
1935年	21,248,864	16,598,923	78%	25,834	300,943	540,221	1,400,003	633,926

（注）1．朝鮮総督府統計年報（大正14年～昭和10年度）より作成。職業別の数字は各職業別の総数を表す。

2．小作争議数は朝鮮総督府農林局の『朝鮮小作年報』（第2輯）1938年より作成。

て工業原料獲得の為の鉱山開発政策を行った<sup>22)</sup>。そして内鮮一体を口実にして関税制度を日本に有利に改革し、農産物原料の対日輸出を活発化させた。しかし、生産者は高い小作料や肥料代、種々の農業金融に対する高利の負債などの重圧から、それらを賄うために廉価でも生産物を売らざるを得ない悪循環の中において、対日貿易が活発にみえても実際は農林業の零細経営は悪化する一方であった。畜産業も農村の副業として扱われたので、ほぼ同じ状態であった。

植民地中期の朝鮮民衆を職業別に区分すると、表1でみられるように総人口の8割以上が農林及牧畜業に従事していた。多くの農民は併合前まで土地私有権の概念が希薄であったために、日本は土地調査を実施し、土地私有権の申請がなかった農地を没収した。それは日本人地主のさらなる朝鮮進出のために必要な土地を確保する目的であった。耕作権を失った農民は土地から離れられず小作農民へと転落するが、農村を牛耳っていた地主や日本人の富農による高率小作料による搾取などで、零細農民層の不満は高まった。そして、悲惨な窮民の不満は、農民大衆の日常利益を擁護すると同時に朝鮮革命という政治的課題をも遂行することを目的とした共産主義者が指導する急進的農民組合運動に接近したり、農村啓蒙運動等に鼓舞されて活発な小作争議を展開した。表1でみられるように農業恐慌による穀価の暴落と地域農業組合費の高い負担とのギャップを原因とする小作農民の争議が1933年から急速に増加するのである。

地主に搾取される小作農民の抵抗運動の急増の背景には、思想弾圧の激化によって思想運動が禁じられた知識人層が、農民啓蒙運動や社会運動を指導して大衆の基盤を拡大しようとした（八峰らのKAPF団体の活動をも含む）こともあったといえる。1925年には83%を示していた農林及牧畜業も、1935年になると78%へと減少するが、それは過酷な搾取に耐えきれず多くの農民が土地を離れて、近隣都市へ職を求めようになったためである。

しかし、工業の発展で都市の近代化が進んだとはいえ、朝鮮の労働者環境は整っていなかった。工場法が朝鮮には制定されていなかったため、当時の資本家の8割以上を占めていた日本人（表2参照）資本家は、朝鮮の労働者を日本国内よりもはるかに低い賃金（日本人の半分以上）<sup>23)</sup>・長時間の重労働で利用した。1920年代後半は不安定な‘単純自由職労働者’（季節的要員として雇用と失業を繰り返す労働者）が90%に至り、比較的安定した職を持っていたのは1割に過ぎなかった。その劣悪な労働条件により、賃金の値上げや労働環境の向上を求める労働争議が各地で頻発した。一方、農村の困窮で都市に職を求める離農労働者の集中により、都市失業者や乞食（土幕民）が増加し、貧困による衛生問題や犯罪などの社会的問題が総督府の重要な課題となった。

### 教育の実態

農民や労働者は逼迫する生計に追われて、近

表2．1920年代の朝鮮国内の企業数

	朝鮮内の企業数	日本人所有	朝鮮人所有	資本額（朝鮮人企業）
1920年代後半	544社	414社	99社	6.3%

（注）キムジュン「1920-30年代労働運動での民族問題と階級問題」『日帝下の社会運動と農村社会』文学と知性社、1990年、53-54頁参照。

表3．1923-1935年までの朝鮮の教育別

教育機関 年 代	公立普通学 校卒業者数	書 堂 の 生 徒 数	中 学 校 生 徒 数	高等普通学 校生徒数	女子高等 普通学校 生 徒 数	官立京城 帝国大学 の生徒数	海外渡航 研究留学生
1923年	21,112	256,851	144	3,844	842		43
1925年	40,674	208,310	174	4,937	1,306		43
1927年	59,261	189,260	216	6,250	2,069	89	65
1929年	60,947	162,247	266	6,921	2,589	166	37
1931年	63,248	146,901	340	6,882	3,057	182	31
1933年	73,713	148,105	323	7,357	3,236	202	10
1935年	93,595	161,774	335	7,992	3,761	210	9

（注）朝鮮総督府編纂『朝鮮総督府統計年報』（大正12年 - 昭和10年）より作成。

（備考）公立普通学校欄以外は朝鮮人の生徒数のみを表示。中学校・高等普通学校は公立，女子高等普通学校は公立より約1.5倍多く在籍していた私立（同資料の昭和10年版316-317頁参照）の生徒数を表示。印の1923年の高等普通学校生徒数だけ官立。

代教育・高等教育を受ける余裕も機会もなかった。しかし、社会の近代化とともに近代教育の普及の必要性が高まり、文化政治の下で、1922年に第2期朝鮮教育令が公布された。それまでは主に普通教育、実業教育、専門教育の学校しかなかったが、師範学校と大学設置によって新たに大学教育を受ける道が開かれたのである<sup>24)</sup>。

当時の小学校（1941年からは国民学校と改称）では、朝鮮人生徒は在朝内地人の1%ほど（『朝鮮総督府統計年報』の大正14年版656-657頁参照）にすぎない。朝鮮人の初等教育の状況を窺うために、表3では在朝内地人の在籍が1%弱であった公立普通学校の生徒数を示している。それによると、人口の増加もあるが、1923年の公立普通学校の卒業者に比べると、1935年には4.4倍以上に増えている。即ち初等教育の就学率は高まり、教育の背景となる社会の近代化が進んでいることが推定できる。他方、従来の地域社会で定着していた書堂（既存の漢文など民間の初等教育を行う私塾）の生徒数は、1923年に公立普通学校卒業者の12倍を越えて

いたが、近代教育の普及とは対照的に減少し、1935年には書堂の生徒数は普通公立学校の卒業者数の半数を割っている<sup>25)</sup>。また、普通学校が修業年限6年の為、中学校の生徒数は非常に少なく、在朝内地人の約6分の1であった。また、上記の表では高等普通学校や女子高等普通学校の生徒の増加による、高等教育の伸びが顕著であることがわかる。

なお、日本は植民地統治を円滑にするために、朝鮮社会を研究する機関の必要性及び内地人の大学教育、知朝知識人・親日朝鮮人の養成の必要性を認めるようになり、1924年5月に官立京城帝国大学と同大学予科規定を公布し、1926年に学部を開設した。1920年の日本の大学卒業者が既に5,466名（大正9年度『日本帝国文部省第48年報』参照）であることを考えると、朝鮮の大学教育が遅れていることがわかる。1922年11月に朝鮮にも大学を設立しようという民衆運動として私立大学期成準備会が組織されたが、四百万圓の募金が達成できず、有耶無耶になってしまい、1926年の官立大学まで朝

鮮には大学教育の場がなかった。従って、大学教育を求める朝鮮の青年達は日本の大学に留学をすることを望んだ。この留学帰りのインテリ層は後の朝鮮社会へ大きな影響を与えた。また、教育の刷新の方針に基づき、米合衆国や欧州諸国を中心に在外研究員が派遣されるようになった。しかし、1927年には65名も派遣されたが、その後減少し、1942年<sup>26)</sup>からは海外渡航者欄がないことから、総力戦に突入していった状況を垣間みることができる。

### （3）言論規制の緩和と思想的動向

#### 言論規制の緩和

武断統治による言論や出版物の規制が緩和されると、新たな思想の紹介や民族の主張の場が広がった。総督府は言論規制緩和の理由を次のように述べている。

「(それまでの方針は - 筆者注) 民意の暢達上遺憾渺なからざるのみならず朝鮮文化の向上を阻害し又一面時代の趨勢は到底永く此の消極的方针を墨守することを許さざるを以て大正八年制度改正以降各種制度の改正と共に朝鮮内に於ける出版に対する方針も亦之を改更し出版の自由は努めて尊重することとし従来執り来れる消極的方针を徐ろに緩和し即ち新聞雑誌の発行出願に対しては其の分布状態経営の内容その他諸般の事情を精査考究し之が必要を認むるものに対しては発行の認可又は許可を与えたり。」<sup>27)</sup>

これは文化政策で提示した民意暢達の実行という面で解釈できるが、それまでの一連の過程から推察すると、言論緩和は円滑な朝鮮支配を遂行するための方策だったというわけである。実際、1920年1月に民族陣営の李相協が『東亜日報』を、親日的な大正実業親睦会の芮宗錫が『朝鮮日報』、新日本主義者の関元植が

『時事新聞』の認可を得るが、同族による経営とはいえ、親日的新聞2に対し民族陣営新聞1の比率<sup>28)</sup>からすれば、外面的には大きな譲歩にみえるが、裏を返せば柔軟に見せかけた朝鮮支配の強化であることがわかる。なるほど、1930年の「朝鮮人の新聞紙、雑誌発行状況」によれば「(中略) 毎日申報は本府の機関紙となり時事新聞は其の後時事評論と改題し月刊雑誌となり親日団体国民協会の機関紙たり。」(警務局『朝鮮に於ける出版物概要』)となっており、発行認可の目的が植民地支配の遂行にあることは明確であった。『毎日申報』とは、1905年にイギリス人Ernest T. Bethellが創刊した『大韓毎日申報』だったが、あまりにも強硬な排日主義の論調で統監府に対抗したため、Bethellの死後の1910年に統監府が買収し、以後解放まで御用新聞として存続した。

一方、内地人による新聞は『京城日報』(1906年発行)、『セウルプレス』(1907年発行)、『釜山日報』(1907年発行)、『極東時報』(1908年発行)など、1920年に文化政治が始まる前まで20社の新聞が発刊されていた。この数の差を見ただけでも、朝鮮民衆が独自の言論を希求したのは当然であった。

さて、1930年まで発行されていた朝鮮人経営者の新聞は、前述の認可された新聞のほか、1922年発行の週刊紙『大東新報』や1924年発行の『時代日報』、『南鮮経済日報』があった。中でも、崔南善が発刊したが財政難で1926年に廃刊した『時代日報』は、同年9月に李相協が『中外日報』(後の『中央日報』)として復刊させた。李相協は1923年に『東亜日報』を退社後、朝鮮日報社を買収して運営していたが、同社の左翼記者たちの大量検挙で1925年に退陣した。八峰も後に『中外日報』の記者として

働くが、当時の社長であった李相協は独自の発想で朝鮮の新聞界の発展に大きな功績を残した<sup>29)</sup>。

その頃になると文化政治の色も褪せて、内地で治安維持法が公布されると、思想弾圧や言論弾圧は一層厳しくなっていた。しかし、時代は既に武断統治の状況とは異なっていた。留学帰りの知識人層の台頭による近代思想の普及や朝鮮国内の民衆の自覚が高まり、近代社会の発展に不可欠の言論の自由に対する民衆の支持は高まっていた。『朝鮮出版警察概要』によれば、「新聞紙規則に依り内地人の発行する新聞・通信・雑誌は昭和十四年末現在に於て新聞紙三十五種、通信七種、雑誌十七種計五十九種、一方新聞紙法に依り朝鮮人の発行するものは同十四年末現在に於て新聞紙二十二種、雑誌四種、計二十六種(略)」<sup>30)</sup>と記されており、1919年までの20紙対0から比較すると、朝鮮民衆の言論の場が飛躍的に拡大したことを知ることが出来る。また、日本の抑圧からの解放の課題を背負っていた多くの朝鮮知識人層は、新聞を事実を伝えて大衆の啓蒙を図るだけの媒体とはせず、紙面を通じて社会改革(大衆教化)及び民族解放への方法を模索した。機会あるごとに過激な内容を掲載するため、削除、発売禁止、没収、発行停止を繰り返しながら、言論の場を利用して闘った知識人層の役割は、近代文化史において無視することはできない。朝鮮の新文化運動の先駆者であった李光洙や崔南善など、そして金基鎮も新聞記者出身であった。当時の新聞記者が知識人の代表的な資質を持っていたことを、趙容萬は次のように述べている。

「(3・1万歳運動)以降は新聞記者が職業化することで変化はしているが、彼らの品格は相当高く憂国志士の気概を持って、新文化運動の

先駆者となっていた。(中略)実際、政治運動をすることができなかった時だけに、新聞社は民族運動の本部であったのであり、新聞記者は愛国的闘士であると同時に新文化運動の先駆者であったのである。」<sup>31)</sup>

多少美化しすぎた解釈にもみうけられるが、民衆や祖国を意識した彼らの行動は評価すべきことである。池明観は『東亜日報』『朝鮮日報』に関連して、「新聞は、抑圧された民衆の抵抗の場として出発した。また、エリートたちの啓蒙運動の場所であり民族文化を育む新文化運動の広場であった。新聞は国内の民衆運動を推進するとともに、愛国運動のために投獄された人々のことや海外での独立運動のニュースなどを詳細に伝える努力を惜しまなかった。全世界における弱小民族の抵抗や社会変革のための革命的な努力を伝えた。新聞人は、すなわち愛国者であるという民衆のイメージが作られた。」<sup>32)</sup>と述べている。行動の制約が多かっただけに、事実を伝えようとする言論人(ジャーナリスト)の行為に潜む勇気を高く評価しているわけである。なるほど、民族の解放や近代化を何よりも考えていた朝鮮人ジャーナリストらの活動の活発化と言論統制の緩和は、植民地という特殊な状況で生じた偶然のそして短期間の状況ではあったが、所属する社会を必死に担おうとした彼らの志は評価すべきである。だが、これらの民族新聞は、1940年になると総動員体制の強化により、全て廃刊に追い込まれ、朝鮮人ジャーナリストは活動の場を失うようになる。

### 思想的動向

一方、言論の緩和は、これまで抑圧されていた民衆の意志表示の場を提供する契機となった。固く塞がれていたダムに開けられた小さい

穴は、つかの間の水路にすぎなかったが、様々な近代思想を運び入れるチャンネルとなった。そして、民族解放を最終目的あるいは副次的目的とする様々な活動、社会主義、反帝国主義の民族運動、階級革命の共産主義、反儒教の新自由主義などの動きが活発となった。中でも特記すべきことは、この時期に登場する社会主義者や共産主義者の活動である。総督府は民族解放運動の力量を、まだ未熟で形になっていない思想活動の方へと分散させた。即ち、全民衆の団結による抗日の勢いよりは、少数の活動家の過激な運動の方が押さえやすいという狙いがあったのである。少数の活動家とは、祖国解放の必然性を自覚した人々そして留学先で新思潮を得て帰国した人々たち<sup>33)</sup>のことである。

1924年4月に共産主義者が率いる朝鮮労農総同盟が167労働団体を結合して結成された<sup>34)</sup>。これらはソウル青年会と日本留学生系の一月会が組織したものであり、労働者・農民の生活向上と社会改革という階級闘争の意識を高めることに全力をあげた。また、朴憲永率いる火曜会（後の朝鮮共産党の中心勢力）も労働者・農民組織を結束することに力を注ぎ、強力な基盤を構築していた。彼らの指導下、不当な待遇に対する労働者たちの争議が各地で起こった。付表2の「民衆運動」欄を参照すれば、各地で様々な職種のストライキが発生しているのがわかる。中でも1929年1月に起きた元山ゼネストは82日間におよぶ植民地時代の最大規模のストライキとなった。また、青年組織や学生運動も高まった。しかし一方では、早くから上海とイルクーツで共産主義活動を行っていた革命運動家たちが文化政治の思想緩和期になると国内に戻って活躍するようになったが、朝鮮における党の結成や勢力確保をめぐる指導権争い

が各派の間で絶えず、時には暴力沙汰にまでなった。共産主義活動の内紛が絶えないために、抗争を止揚した民族単一の共同戦線が課題となり、1927年2月に新幹会が組織された。民族主義左派と社会主義の両陣営が提携し、分裂していた諸団体を統合し、民族文化の昂揚と民族解放を目指す目的で結束したのである。だが新幹会は創立して1ヵ月余りで会長・李商在が他界して動揺する中、当局の集会禁止や幹部逮捕、両派の衝突が重なり、創立大会以来4年3ヵ月ぶりに開かれた初大会で解散することとなる。新幹会の動きは、民族の解放という究極的目的の為に思想と理念を異にする民族主義路線と社会主義路線が戦術的に結合した団体であり、分断時代が抱えている歴史的課題である統一に糸口を提供した<sup>35)</sup>とも解釈できるが、当時の民衆が求めてやまなかった共同戦線の失敗は、反帝国主義民族主義闘争においても、左右両派は協同の戦線を構成しえないという苦い経験<sup>36)</sup>を残して、民衆へ挫折感を与える結果となった。

また、1925年の治安維持法による厳しい思想弾圧は、共産主義運動を完全に壊滅させた。同年11月から始まった第1次朝鮮共産党検挙、1926年の第2次検挙、1928年の第3次、第4次検挙、そして、逮捕を免れた活動家で組織されたML（マルクス・レーニン）党まで一斉に検挙され、1930年3月17日までに朝鮮の共産党員1,171名が検挙された<sup>37)</sup>。共産党の活動は全面禁止となり、以後はコミンテルンの直接指導下、非合法的な地下組織として活動するが、警察当局の抑圧は一層厳しくなった。翌年には再任していた斉藤総督が辞任してその3ヵ月後、日本軍による中国東北地方への侵略開始とともに、言論や刊行物出版、思想活動は氷河期

を迎えるようになる。社会主義文化活動組織として結成された金基鎮等のカップもそれを免れることはできず（少壮派は日本でナップなどと提携して活躍していたが<sup>38)</sup>）、1931年と1934年の検挙、そして翌年には解散に追い込まれるなど、思想活動の統制は戦争の気運が高まるとともに強められていった。

## 第2章 金基鎮の活動

本章ではこれまでに述べた社会状況下での八峰の活動を検証してみたい。

八峰は、社会主義思想を持ち、文化芸術を手段として革命文学の普及を目的とする組織のカップ（KAPF）を結成した文学者であった。八峰が社会主義の影響を受けた時期は短く、十分にその思想やそれを教えるだけの知的基盤が熟してなかったため、その理論を植え付ける事は出来なかった。しかし、知識人、とりわけ文学者としての姿勢を固守し大衆芸術を主唱した彼の訴えには、これまでの朝鮮文壇にはなかった新たな論調が含まれていた。既存の耽美的あるいは芸術至上主義の文学が植民地の朝鮮ではブルジョア文学だと批判される中、大衆教化による革命文学を追求する八峰らの目的意識は、一部の支持層を得るようになる。けれども、のちに革命的思想を持ち武装化を唱える若い留学帰りの少壮派が活動するようになると、八峰はカップの前衛から一步下がって、新聞記者のかたわらビジネスを営んだりした。

だが、本稿では八峰の個人史を全部取り上げるつもりはない。党派間の偏狭な対立に陥りがちな政治とは一線を画して文学者の立場を固守し知識人層と大衆との架け橋を試みた八峰の文芸論の考察、そして八峰のジャーナリストとし

ての言論生活、の2点に中心をおいて、植民地の状況下で煩悶する近代インテリ青年が果たした役割や問題点を取り上げて論じることとする。

### （1）金基鎮の文芸活動

八峰は3年間の日本留学を終えて1923年5月に帰国後、日本で学んだ社会主義思想に基づく随筆や評論を多数発表し、朝鮮におけるプロレタリア文学運動の発足へ向けて先導的役割を果たした。当時、ツルゲーネフやゴーリキーが最も多く紹介されていた朝鮮に、フランスの作家アンリ・バルビュスによって組織された反戦知識人運動のクラルテ運動を紹介した。また、「アンリ・バルビュス対ロマン・ロランの論争」を客観的な態度で全訳して発表し、バルビュスが主張した知識人の役割に共感した八峰は、今日の朝鮮の文学者は大衆の教化の為に実践的な行動を行うべきであると唱えた<sup>39)</sup>。もちろん、八峰の留学は最初から入念に計画された留学でもなければ、社会主義思想を体系的に学習しようと考えていたわけでもない。3年間異郷での生活と格闘する中で、麻生久や『種時く人』などを通じて社会主義思想や労働者文学と遭遇したのである。だが、未熟な思想であったにしろ、前述したように、日本の武断統治と根深い儒教の慣習が二重に民衆を抑圧していた朝鮮において、「白手」（＝インテリ）の芸術至上主義が大半を占めていた知識層へ「大衆の教化のために実践的行動を行うべき」だと主張する八峰の思想は、プロレタリア文学運動を育む培養土となった。以後、親友の朴英熙が文芸担当者であった『開闢』誌を中心に論陣を張るようになる。1920年に宗教雑誌として認可された『開闢』<sup>40)</sup>だが、八峰らが参加するようになると左翼陣営

の雑誌の色が濃くなり、当局の思想弾圧が厳しくなる1926年に廃刊へと追い込まれるまでは社会主義的知識人層の発言の場となった。

八峰は1924年1月に同誌で、朝鮮の社会体制や日本主義に洗脳される教育の現状を批判した後、知識階級とあらゆる民衆が共同戦線を作るべきであると結論づける「支配階級教化、被支配階級教化」（13～27頁）を発表する。八峰の変革の思想は植民地民族の解放と同一のレベルで捉えられているのがわかる。アンリ・バルビュスや小牧近江が唱えていた国際知識人の共同戦線運動は、八峰においては民族解放の方法としての共同戦線として、より切実な現実への課題となっていたのである。その思いが積極的な執筆活動へと向かわせた。そして文筆活動の最中、八峰は平壤で起きた「共産主義宣伝事件」に関与し、検挙されるのである。当時共産主義者で知られていた鄭柏や李星泰、辛日鎔と親しい関係<sup>41)</sup>であったために参加したものと考えられる（八峰自身はこの事件に関してはまったく触れていない）。八峰がソウル青年会の知人らと直接民衆の指導を図ろうと試みたか、あるいは朝鮮のプロレタリア層の現実を体験しようと試みたためであろうと推測できる。その後、同年10月以外は執筆活動が継続され、翌年の組織結成でも活躍することから不拘束処分となったと考えられるが、以後八峰は民衆に直接指導を行う思想運動家というよりも、文学者としての立場を固守し、文学理論における階級意識の確立を追求するのである。

1925年8月、八峰は社会主義的階級意識を文学運動として起こそうとする趣旨で、朝鮮プロレタリア芸術同盟を結成した。当時、共産主義理論に心酔していた兄・金復鎮と朴英熙が綱領と規約を作って、新傾向派の文学青年たちが

結束したのである<sup>42)</sup>。だが、組織はしたものの、活動は個人別が多く、翌年に機関誌として『文芸運動』を発行するが、朝鮮国内の弾圧により3号以上継続できなかった<sup>43)</sup>。しかし、既存の芸術至上主義や耽美主義志向の文学、或いは無産階級に対するセンチメンタルな同情心から自殺、放火、殺人などの陰鬱な出来事を好んで取り上げようとした新傾向派文学よりも、大衆の教化と革命的で徹底した階級文学の必要性を唱えた八峰の活躍<sup>44)</sup>は目映い光のように朝鮮文壇を照らしたのであり、文学を武器とする芸術同盟を志す文学団体KAPFは彼らの活躍で確固たる社会的位置を築いた。

一方、八峰はプロレタリア文学運動を鼓舞するとともに、小説の価値を現実の改革と闘争的階級意識からのみ評価することで、創造的芸術である文学自体の価値が劣ることを懸念していた。そして、1926年12月号の『朝鮮之光』で朴英熙が発表した小説「徹夜」と「地獄巡礼」に対して、「（中略）我々は無産階級者だ。無産階級は敵の階級と闘争しなければならないということを語るためにあまりにも（内容面での展開を 筆者注）簡単に処理してしまった。その結果この一篇は小説ではなく、階級意識、階級闘争の概念に対する抽象的説明に始終して、一言一句がこれを説明する為にだけ使用されたのである。小説とは一つの建築物である。柱もなく垂木もなしで赤い屋根だけをのせた建築物があるのか。」<sup>45)</sup>と批判した。階級意識と芸術的形式の調和を追求すべきだと考える八峰は、現実の改革と闘争に文学の価値を見出そうとしていた朴英熙の反論を受けて数ヶ月に及ぶ論争となった。いわゆる「内容と形式」論争である。KAPF内部の中心人物による最初の意見対立といえるが、長期にわたる二人の論争はそれぞれ

を支持する派閥論争へと発展し、組織的革命意識の高揚を追求していた他の会員の反感をかうことになった。やがては組織内部の分裂をおそれた李星泰と兄・金復鎮が間に立って、今我々の無産階級運動が完全な建築を要求する時期ではないとの理由で八峰に詫びを迫ったため<sup>46)</sup>、八峰は自分の信念よりも組織内部の軋轢を避けるために自説を撤回する形となった。ここで注目すべき点は、二人の文学者の論争に、共産主義活動家であった李星泰や兄の圧力によって組織の秩序が優先された点である。即ちKAPFは文学者による運動団体ではあったが、実質的には共産主義・社会主義的組織に左右されていたことがうかがえる。八峰個人の理念や文学の形式重視説は、組織の利害と革命芸術による目的達成の前に跪く形となったわけである。後に白鐵はこの論争に関して「金基鎮の意見が受け容れられなかったのはプロ文学の為に哀痛（非常に悲しい 筆者注）すべきことであった。なぜならばこの論争において金基鎮の意見が文学論として正当であり先見的な点からこの意見が通ったならプロ文学の事態は相当異なったであろう（略）」<sup>47)</sup>と述べている。だが、我々はこの論争を通して、当時のプロレタリア文学の理論が論争を行える水準まで成長していたことを知ることができる。

少壮派がKAPFのイニシアチブを取る中、八峰は文学作品の大衆化問題、通俗小説問題、創作方法の問題などについての意見を発表するが、これらは目的意識の先鋭化を主張する少壮派の批判により、KAPF内部の論争へと発展した。この論争は、日本のプロレタリア文学界でも闘わされていた。そもそも通俗小説論やプロ文学の大衆化論が本格的に台頭するのは1928年5月の『戦旗』創刊以来のことであり、プロ

レタリア芸術家は大衆が求める面白さの為にひと真似するより、芸術の源泉である大衆の生活を探るべきだと主張する中野重治の「いはゆる芸術の大衆化論の誤りについて」（同誌1928年6月号、16～22頁参照）に対して、「中野重治は理想論・観念論を書いているだけだ」と反論する蔵原惟人の「芸術運動当面の緊急問題」（同誌、同年8月号、82～85頁参照）が発端となって、全日本無産社芸術連盟（ナップ）内部での論争へと発展した。双方の反論を批判して、林房雄（蔵原理論を支持する方だが 筆者）は「遅れた層に受け入れられる文学をプロレタリア大衆文学」<sup>48)</sup>といい、プロレタリア大衆文学の形式重視論を評価し、文学内容の単純かつ初歩的で、大衆に読まれやすい面白さ（遊戯的要素を含む）、大衆自身の文学を描写すべきだと論評した<sup>49)</sup>。『戦旗』を中心に繰り広げられたこの論争は、1929年、蔵原惟人による「プロレタリア芸術の内容と形式」論では、芸術一般の内容と形式の相互関係とその弁証法的発展を論じ、プロレタリア芸術の形式もすべての芸術的技術的形式を利用した上に打ち建てられるべきだという反論が続いた<sup>50)</sup>。この論争は1930年7月号の『戦旗』で、日本プロレタリア作家同盟中央委員会の名で「芸術大衆化に関する決議」を発表し、大衆化問題における同盟の「芸術運動のボルシェビキ化」の方針路線に沿いつつ芸術形式の多様化を取り入れることで問題の解決をはかるという内容で、一応論争は打ち切られた。つまり、ナップ内部の分裂を意識した同盟の取りなしによって一段落させたというわけである。

一方、朝鮮では八峰が通俗小説への展開を提起し、マルクス主義文芸家は大衆の読者を得るために通俗小説（新聞小説）<sup>51)</sup>へ進展すること

が必要であると主張した。ナップの影響は無視できないが、八峰らが目的としていた社会主義イデオロギーの注入の側面と朝鮮民衆の教養の現状を考えると、この論点は当然越えなければならない峠となった。即ち、マルクス主義階級文学の支持者を獲得する為には大衆の意識が低い現状への対応を考えざるを得ないことから自然に発生した問題であり、それまで堅すぎる理論ばかりのプロレタリア文学作品が大衆層に浸透できなかった点を指摘して論じたのである<sup>52)</sup>。さらに八峰は、通俗小説論からより詳細に大衆概念を論じた「大衆小説論」を『東亜日報』（1929年4月14日 - 4月20日）で発表した。ここで八峰は、「大衆」は労働者と農民であり、大衆小説 = プロレタリア小説だとしたうえで、大衆は無知で鈍感で意志を喪失して中毒患者であるがために直接的教養と訓練が必要だと力説する。そして、直接的教養と訓練の助手としての大衆小説が従来のプロレタリア小説の他に必要であることを次のように述べている。

「プロレタリア小説はもちろん全大衆のものであるべきだ。しかし大衆の中には一般的教養の差異（文字またはその他の常識の差異）と特殊な教養の差異（文芸的趣味と階級的意識の差異）の程度によって上下層を区別することができる（略）。従って、プロレタリア小説は大衆の教養の上下の程度によって必然的に二つの方法を取るようになる、この二つのプロレタリア小説はプロレタリア階級の為に制作されるのであり、イデオロギーの目的と精神においては同一である。ただ、従来のプロレタリア小説は体裁と文章が高尚で理論的であってもかまわないが、大衆小説は体裁と文章が平凡で通俗的であるべきで、理論的になるのは適当ではない。」（1929年4月16日）

つまり、八峰は朝鮮におけるプロレタリア文学には、知的水準からみて無知の階級に合わせる大衆小説が別に必要であると述べているのだが、八峰の大衆文学論は林房雄が1928年の『戦旗』10月号で論じたプロレタリア大衆文学論の内容と重複することから、林房雄理論を引用したと考えられる<sup>53)</sup>。これに関して、金允植は通俗小説論は八峰の肉声に近いが、大衆小説論は林房雄の理論をそのまま導入したのだ<sup>54)</sup>と批評している。また、「八峰の大衆化論は大衆の韓国的把握、社会的構造との解明がなかったことに限界があった。大衆を漠然と無知の読者層としてみて出発したのは論理の安易さを意味する」<sup>55)</sup>と述べている。だが、八峰は朝鮮社会の把握なしで、漠然と論じたのではない。大衆小説論を発表する3ヶ月前に「10年間の朝鮮文芸変遷過程」を発表し、その中で無産階級文芸運動の過程と関連した教育別、職業別の社会的情勢などを具体的に表で取り上げているのである<sup>56)</sup>。八峰が大衆を二元化して論じたのは林房雄と同様の極端な面があるが、少なくとも当時の朝鮮社会の情勢を把握した上で、読者層を論じようと試みたことは認めるべきであろう。

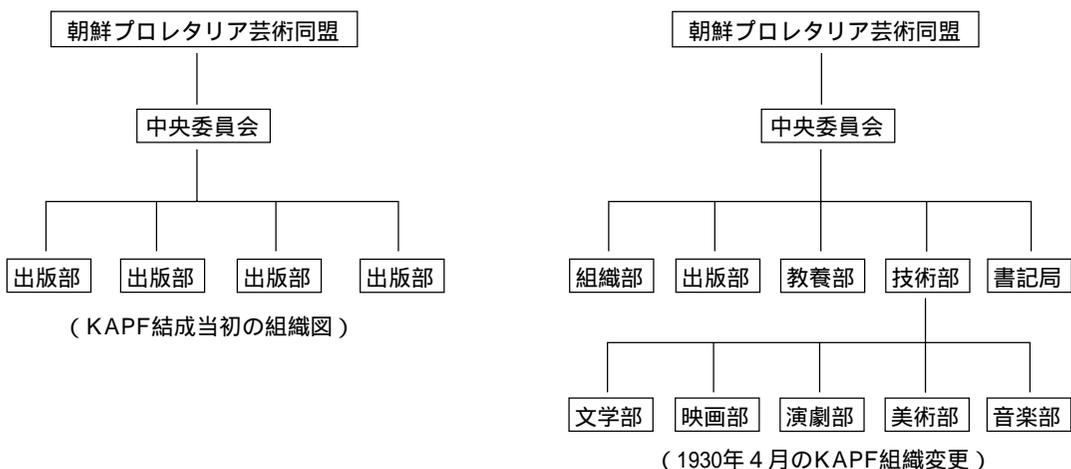
八峰はまた翌年の1930年1月号の『朝鮮之光』誌で、無産文芸の大衆化問題を「発表機関の問題、検閲制度の問題、読者大衆の教養程度の問題、作家及び詩人の技術問題」に分類し、独自の発表機関を持つことや検閲の現状と読者の理解度を考えて、大衆に親しく馴染める書き方で検閲を通過できるようにすべきだと論じているのである。ここで単に社会主義文学者としてだけでなく、植民地の知識人としての八峰の苦悩が顕れているといえる。即ち、思想弾圧のために独自の機関誌を継続して持つことが

出来なかったことや検閲の厳しさをいかなるテクニックで切り抜けて、大衆教化を計るべきかを八峰なりに悩んだ結果がみられる。プロレタリア芸術運動を通して、大衆と知識人との架け橋役として苦悩する八峰だが、合法的活動を模索する八峰の現実的提案は、少壮派には歯痒い行動として捉えられ、プロレタリア芸術のアジプロ的任務を放棄したブルジョア的改良主義者であり、革命的原則を放棄する武装解除論者だと批判された。中でも日本で活躍していた林和は「彼（八峰）自身が可憐な英雄主義の主人公として、無産文芸は今では自分が数三年前（数年前 筆者）に述べたその道に再び退却しなくてはならない処にあるだろうと豪語して、従って自分は如斯な明確な先見者であり、予言者だと語る、実に精神病理学に属すべき叫声を発した。」<sup>57)</sup>と非難した。このような辛辣な攻撃からすると、政治的武装により、手段を問わず、プロ芸術の大衆化を目的として闘争していた日本滞在中の林和らにとって、八峰の大衆化論は社会主義革命文学原則の武装を放棄した裏切り

者として受けとめられたのかも知れない。だが、植民地朝鮮における大衆の教化及び階級文学の大衆化という目的の為に提言した八峰の大衆化論は、植民地のプロレタリア文学者としての民族解放の意識高揚と階級文学の模索への試みであったことには違いない。即ち、小牧近江が留学から帰って日本でプロレタリア文学運動の土台を創り上げながら、様々な主義主張の持ち主たちと親交を持ちつつ、最後まで文学者としての立場を固守した如く、八峰も民族意識の高揚とイデオロギー注入の方便として文学を利用し、直接行動による闘争よりも文学者としての立場を保持しつつ、大衆の教化に努めようとしたのである。

しかし、戦争の気配が強まり思想弾圧が激化すると、KAPFの徹底的武装化を唱える少壮派が実権を握って、KAPFの運営にあたった。そして、芸術大衆化理論の高潮とともに、文芸運動に限られていた朝鮮プロレタリア芸術運動をより広く展開するために、1930年4月のKAPF再組織の際に技術部を設けて（図2参照）、八

図2 . KAPFの組織



(注) 安漢「朝鮮プロレタリア芸術運動略史」『思想月報』第10号、1932年1月、150頁、163-164頁より引用。  
金基鎮は中央委員会の主なメンバーであり、後に技術部の責任者として主に演劇部において活動を行った。

峰を演劇部の責任者とした。八峰は日本留学中に新劇運動組織‘土月会’を結成し、また1927年に朴英熙、趙明熙らと大衆教化の目的で‘赤蟻劇団’（ブルゲミ劇団）を組織した経験などから、責任者に指名されたと考えられる。

1927年1月に、プロレタリア演劇組織のブルゲミ団を結成して、「解放されたドンキホーテ」などを準備したが、検閲で公演までには至らず、解散となってしまった（延鶴年「演劇雑観」『朝鮮日報』1928年、1月6日参照）。演劇部の担当となった八峰は、大衆芸術論の政治的戦術としてプロレタリア演劇運動を広める為に、各地方に劇団を発足させて、公演活動を行わせた。1931年に「移動式小型劇場」がKAPFの主導下で設けられ、翌年の9月には「新建設社」と改称し、演劇公演を行った。だが、1934年全州での公演期間中に一人の学生が「新建設社」公演のピラを所持していたことが発覚し、芸術公演を口実に赤化を企図したという理由で1935年にかけてKAPF幹部の検挙旋風が吹き荒れた。これがいわゆる「新建設社事件」<sup>58)</sup>である。病床の林和を除いて、KAPF全員が逮捕される中、京畿道警察署による解散への圧力と総督府の思想弾圧の強化、政治的路線の内部的対立により、KAPFは1935年5月21日に八峰と林和らの名で解散届けを出した。

時勢はもはや日中戦争に向けての総動員体制一色となり、当局は戦争遂行への妨げとなる組織を潰していった。そのような統治体制強化の下で、当初の目的を達成することが出来なかった八峰は、「(1920年代のプロ文学者達が)概ね感情的・神経質的な気質だったために、彼等の文学もそれ以上発展出来なかったものといえよう」<sup>59)</sup>と、その無念さを語っている。だが、

どちらにしろプロレタリア革命理論に祖国解放と大衆教化を見出そうとして重荷を背負っていた青年達が、国を挙げて大陸侵略を欲する日本の武断政策と闘うには、現実的には力量不足だった。しかしながら、難航しながらも大衆教化をもって旧因習の打破と民族解放を知識人の使命として社会運動への展開を模索した彼等の行動は評価すべきものがある。そして、大衆と共に目的意識を追求し続けた八峰の文学者の使命は、知識人の社会的責任が曖昧になっている今日の社会に示唆するところが大きい。

## (2) 金基鎮と言論生活

八峰は新聞記者として糊口をしのぎつつ、文芸運動に関わっていた。本節では八峰の言論生活の歩みを辿って、文芸活動と両立してきた八峰と近代朝鮮の言論との関わりを考察する。

日本から帰国直後、祖国解放の思いと大衆教化の目的意識が高まっていた八峰だったが、職業としては文筆で生計維持をたてる道を考えていた。帰国後の八峰は『開闢』誌を中心に文学活動を繰り広げたが、両親の同意を得られないまま、新婚生活を始めていたために、生活の問題に直面していた。1924年(22才)9月、平壤で起きた‘共産主義宣伝事件’直後に八峰は『毎日申報』の編集部長の李基世を訪ねた。新聞小説を書かせて欲しいという八峰の依頼に、李基世は正式記者としての入社を勧めた。だが、御用新聞紙の記者というレッテルに抵抗を覚えた八峰は、その悩みを友人に相談をうちあけるのである。ソウル青年会の鄭栢は生活のための職業として就職することを勧めた。社会主義運動の前衛であった彼等に相談を持ちかけたのは、八峰がソウル青年会と親密であったことと、総督府機関紙の記者となる自分への良心的呵責

を感じたためと考えられる。

八峰の初めての職場は皮肉にも毎日申報社となったが、当時の心境は次の文章で窺える。「(李基世が警察担当の外勤を頼みながら 筆者注) 私に毎日申報社会部記者の名刺を一箱くれた。私はこの時本当に死ぬよりもいやだった。」<sup>60)</sup>

毎日申報社の記者になった後も、ソウル青年会のメンバーとの親交は続き、社会主義へ傾倒していくことによる二律背反の精神的プレッシャーに悩む八峰は、当時の『東亜日報』の編集局長であった洪命燾を訪れた。だが、『東亜日報』や『朝鮮日報』は発足して間もないだけに、資金問題や人事異動などの内部問題が続いていて、即就職にはつながらなかった。後に経営問題で揺れ動いていた『時代日報』で人事権を握った洪命燾の配慮で、八峰は『時代日報』へ移った。時代日報社は思想活動も毎日申報社よりも幾分自由な環境だったようである。

1926年に『時代日報』の廃刊で一時職場を失うが、その後身として同年10月に創刊の『中外日報』の学芸部長として働くようになる。その頃は、社会的には共産主義者の活動が活発化して、思想弾圧が厳しくなり共産党員の検挙旋風が吹き荒れた時期であった。1927年からKAPF内部でも方向転換とより左傾化を主張する動きが強まり、翌年に八峰の兄・金復鎮がML党事件で検挙されると、八峰は新聞社を辞め、一もうけをするために事業の世界に転じた。八峰が大金を必要とした理由は、思想的に憧れていたロシアへの留学と家族への生活費を残す為であった<sup>61)</sup>。一時ロシア語を学習していた八峰は、退社後、鰯の加工工場を設立し、一攫千金を謀るが失敗する<sup>62)</sup>。その間、事業の傍ら、『前途洋々』という連載小説を発表していた八

峰は、鰯工場の体験から、漁師を主題とした『海潮音』を後に発表する。

1930年に『中外日報』の副社長であった李相協の勧めで社会部長として働くが、同年8月に経営難で新聞社は休刊届けを出すようになる。再び失業した八峰は、原稿料だけの生活を決意するが、同年秋に朝鮮日報社の誘いで社会部長として再就職することとなった。

こうしてみると、八峰はどんな状況でも就職口がすぐ見つかっていることに気付く。当時の新聞社がまだ今日のように巨大化、体系化していなかった点も指摘できるが、職を得ることができたのは、八峰の人間関係の広さを無視する事が出来ない。

八峰は1929年に、就職活動をする人々の為に「新聞記者になる運動(活動 筆者注)をするならば」の欄を借りて、新聞記者とは実力だけではなく、人脈=勢力を持てば就職出来るという、当人の経験から率直な意見を述べている<sup>63)</sup>。確かに、八峰はそれまで培った人間関係によって、その後も職を得続けるのだが、それは誰もが出来るわけではない。文筆の力は無論、日本留学の経験、社会主義理論家としての評判、主義を問わず親交を持った人間関係、家庭的背景などが揃っているからこそ可能なわけであった。当時の思想運動家に新聞記者が多かったことから、KAPFの理論的指導者として左翼の人脈のなかで高く信頼されていたのである。

当時は共産党員の逮捕が相次ぐ時期だったが、思想の弾圧はKAPFにまで及び、八峰は翌年の1931年に、第1次KAPF検挙事件の際に逮捕された。そして、西大門刑務所に収監された。八峰は同年10月11日付けで、朝鮮プロレタリア文学運動の概略である「朝鮮に於けるブ

ロレタリア芸術運動の過去現在」<sup>64)</sup>を提出した後に釈放される。時々警察の監視を受けつつ八峰は、『朝鮮日報』の論説委員と社会部長を務めたが、新聞社の経営問題による内紛で再び退社する。その間に金鉞の事業や印刷所などの事業を試みるが、印刷所の資金がロシア共産党からの支援金だと誹謗中傷され、八峰兄弟は約3ヶ月の刑務所暮らしを余儀なくされた。

釈放後、印刷所で雇っていた職員の詐欺による借金返済で、家財道具まで質屋に入れた八峰は、時局上「不穏思想運動家」というレッテルを隠す為にも1～2年間毎日申報社で働くように兄から云われて、思い悩みつつ再び『毎日申報』社の社会部長となった。思想弾圧、KAPFメンバーの総検挙、生活の挫折、刑務所での非人間的体験、家族への責任、時局の不安などの要因は、生活の糧を得るために八峰を再び毎日申報社の一員とさせたのである。そして、1940年の退社まで『毎日申報』の記者として働いた八峰は、思想的・文学的活動を極力減らすことで自分の意思を表明したといえる。

解放後も京郷新聞社などで筆を執り、生涯を通して言論の道を行んだ八峰は、日々の出来事を機械的に伝達するのではなく、民衆の意識を啓蒙または教化する役割を果たそうとした人物である。また、朝鮮の初期言論史とともに歩み、植民地朝鮮を直視した八峰には、権力と旧習との狭間で闘う知識人の使命と葛藤を見ることが出来る。

### おわりに

本稿ではまず、八峰がプロレタリア文学運動の土台を築いた過程とその背景を理解する為に、3・1運動と文化統治の様相を取り上げた。

八峰が日本で労働者文学を知り知識人の実践的活動を自覚して帰国した時は、それまでの武断統治体制が3・1運動の衝撃により一時的に「温情」(=宥和)政策に変わった時期であった。言論活動が部分的に認められ、思想活動にも可能性が見えた。即ち、八峰が耕そうとしたプロレタリア文学運動の土壌は準備できていたわけである。八峰がKAPFを組織した時期が、長期にわたる植民地時代の中でもプロレタリア文学運動の受け入れが可能な社会的背景を持った時期であったことが確認出来たといえよう。

一方、八峰がKAPFを組織した時期は、社会的には革命をめざす思想運動ないし社会運動の動きが活発であり、社会主義に興味を持たなかった八峰の兄までもが共産党の幹部として活動するほどであった。しかし、八峰はそれらとは一線を画して泰然自若として文学者としての立場を固守した。のちに、その態度のゆえに組織内部の一部教条主義者らに非難されるが、彼らと格闘しながらも自分の道を歩んでいった。革命のために武力闘争を求める声が強まる中、煮え切らない八峰の態度には思想的に未熟である八峰の限界性がなかったわけではない。しかし、今日から考えると八峰は、過激な政治戦術よりも社会の基盤(=大衆)を巧みに整えること、その為に大衆文化を重んじながら、現実的な検閲や当局の妨害に一つずつ打ち克つように訴えたのである。

巨大な植民地統治勢力に真っ向からぶつかっても、勝算はない。従って、八峰は抑圧された大衆の自覚、生活の向上、大衆の教化こそ民族解放への近道と考えたのであり、特権層であった既存の知識人たちに大衆指導に率先して当たるよう主張した。その活動こそ、八峰が植民地朝鮮で果たした役割と言えよう。即ち、八峰は

文学という手段で知識人層と大衆とを接近させる媒介となったといえる。具体的に述べると、八峰は社会主義思想家及び知識人層を大衆に近づける架け橋としての役割を担って、朝鮮社会にそれまでなかった知識人の社会運動への参加を試みたのである。一言でいうと堅い理論をより大衆化して、大衆がわかりやすく共感できる思想を植え付けようとしたのである。

一方、本章ではジャーナリストの八峰の足跡を追うために、朝鮮の言論の状況をも検討してみた。生活の方便として新聞社に入った八峰は、幾つかの新聞社を渡り歩いているが、解放後もジャーナリストとして活躍した。八峰が新聞記者として働き出す時期は、朝鮮に言論の緩和政策が出されて間もない時であり、八峰の言論人歴を辿ることによって、韓国言論史の歩みをもみることとなった。そして、新聞記者の役割が社会にいかにか影響を与えるか、統制された社会での言論の重要性を再確認できたといえる。

当時の状況からすると、新聞社の記者には民族解放と社会の民主化を模索する知識人が多く、彼らは社会での出来事をただ伝える役割だけではなく、思想活動の中心人物が言論を利用する意図で記者になる場合や知識人が社会的責務及び自分の理念を果たすために新聞を利用することは、言論の自由が抑圧された状況下では自然であった。そして、八峰の思想的活動は新聞社という垣根が守ってくれた部分も否定出来ない。なぜならば、大衆の動きがいち早く把握出来て、情報が集まる場所である新聞社で社会部長などを勤めていた八峰であり、少々の活動には社会的地位からして当局も下手に手を出すわけにはいかなかったはずだからである。従って、本稿では八峰の社会的活動、それを支えたジャーナリストとしての生活そしてその背

景となった言論緩和策、の関連が究明出来たといえる。だが、八峰が書いた新聞記事の全体を論究することには至らなかったため、より詳細な八峰の実態にアプローチすることは今後の課題にしたい。

## 註

- 1) 本稿では金基鎮研究における植民地の時代区分として、日韓併合から1924年までを植民地初期、KAPFを組織して解散する時期までを植民地中期とする。それ以降1945年の解放までを暗黒期とする。
- 2) 1919年3月1日、朝鮮国内の厳しい弾圧に反発して起きた万歳運動。以後全国へ拡散していった大規模な民衆運動。
- 3) 拙稿「八峰・金基鎮の初期文学思想の形成 - 日本留学とKAPF結成までの動向を中心として」『立命館産業社会論集』第33巻第3号所収、を参照。
- 4) 1919年6月の「朝鮮施政要綱」によれば、「三月下旬ヨリ四月上旬二亘リ最猖獗ヲ極メ騷擾回数八百四十余回、官憲側ノ死傷百六十余人、暴民ノ死傷一千九百余人、(中略)」(『斉藤実文書第一巻』)と記載されている。即ち、民衆の死傷が官憲の12倍であることとなる。この数字からも、民衆の犠牲が顕著に大きかったことがわかる。
- 5) 1910年に発布された朝鮮社会令などで朝鮮人による近代工業化の制限が厳しい中、8割を越す日本の企業や資本家の進出で、植民政策とともに朝鮮人労働者や小作人への搾取が激化していった。そこから生じる諸問題が経済的貧困からの解放や民族意識の昂揚、独立運動の高潮となって、3・1運動へと拡大することとなる。『朝鮮総督府統計年報』参照。
- 6) 1919年2月8日、第1次世界大戦後のウィルソンによる民族自決主義提唱に影響を受けた朝鮮の留学生600余名が、東京のYMCAで朝鮮の独立を宣言し、監視していた警察との衝突により30人の学生が逮捕された事件。金乙漢『実録東京留学生』探求堂、1986年、35～36頁参照。

- 7) 金圭煥『植民地下朝鮮における言論および言論政策史』東京大学, 1958年, 154~155頁。
- 8) 1919年の1年間の検挙者19,535名中, 農業10,864名, 卑僕日傭744名, 労働者254名で, 総検挙者の61%を占める人数であった。金圭煥, 前掲, 155頁参照。
- 9) 1919年4月15日, 京畿道堤岩里の教会に訓示をするという理由で集められた住民29名を堂内に監禁して射殺し, 建物を焼き払った堤岩里事件は代表的な事件である。さらに日本軍は近隣の8面15村落で虐殺や放火をするなど, 全国的に大兵力による弾圧を行った。山辺健太郎, 『日本統治下の朝鮮』, 94~97頁, 馬淵貞利「堤岩里事件」『朝鮮を知る事典』平凡社, 305頁参照。
- 10) 参加者200万人, 5月までの3ヶ月間だけで7,509名が虐殺され, 負傷者15,961名, 検挙・投獄者46,948名に至ったのである。文國柱編『朝鮮社会運動史事典』社会評論社, 1981年, 582頁。
- 11) 公約3章を含めた一枚の宣言書の最後には, 「朝鮮建国四千二百五十二年三月一日 朝鮮民族代表」として33人の名があげられているが, 後年になって親日路線で活躍する崔麟などが含まれている。『一九一九年独立宣言書』参照。朴慶植, 『朝鮮三・一独立運動』, 平凡社, 1976年, 90~97頁, 山辺健太郎, 前掲, 65~71頁, で具体的な解釈をみることができる。
- 12) 徐大肅, 金進訳『朝鮮共産主義運動史1918~1948』コリア評論社, 1970年, 57頁。
- 13) 山辺健太郎は, 「三・一運動には労働者や農民がたくさん参加している(通年の運動参加人数が農繁期に減り, 収穫後は増えると分析-筆者注)。(中略)古い王朝的な運動が朝鮮独立運動から姿を消し, やがて民衆が登場するきっかけが三・一運動であった。そして最後に, 運動の発展によって, 民族主義者が独立運動の指導権を失ない, 朝鮮独立運動が共産主義者の指導する運動になったことも三・一運動がきっかけであろう。」と解釈している。前掲, 99~100頁。朴慶植は, 「三・一運動は, 宗教家, 学生などの民族主義者の指導による, 農民, 学生, 市民らを主動力とした朝鮮人民の民族独立の運動であった。(中略)従来の民族運動では民族主義的観点が主であったが, 三・一運動の過程では階級の観点が高まり, 以後民族運動は階級闘争と結合して展開するようになった。それには, ロシア革命の勝利による社会主義, 共産主義思想の浸透・普及を見逃すことはできない。」と論じている。前掲, 294頁。
- 14) 徐大肅, 現代史研究会訳, 『韓国共産主義運動史研究』, 理論と実践社, 1985年, 64頁。
- 15) リチャード・H・ミッチェル, 金允植訳『日帝の思想統制』一志社, 1982年, 22頁。
- 16) 同年3月3日付の『ニューヨーク・タイムス』紙の報道により, アメリカ議会は議題として朝鮮問題の「同情案」を取り上げている。朴慶植『朝鮮三・一独立運動』平凡社, 1980年, 286~291頁参照。なお, 自決権の要求は当然として, 強圧的な朝鮮統治を批判した外国人の文書としては次のものを挙げる事ができる。ゼー, イー, ムーア「朝鮮自決ノ要望」, マッケンジー「『朝鮮二於ケル独立運動』ノ梗概」, ヘンリー, エム, ブルーエン「朝鮮統治批評ノ書柬」『斉藤実文書12』485~512頁。「『韓国の復興』(The Renaissance of Korea)ノ梗概」同, 540~546頁。
- 17) 同年6月, 黎明会に結集した吉野作造, 木村久一, 福田徳三, 麻生久ら6名が「朝鮮問題講演会」で, 武断統治廃止や人道主義統治を論じている。また, 堺利彦や吉野作造などによる朝鮮支配関連の論文が出されているが, いずれも植民地政策の緩和論に留まっている。姜東鎮『日本言論界と朝鮮』法政大学出版局, 1984年, 203~222頁参照。
- 18) 第3代・第5代朝鮮総督。海軍出身。海軍大臣の時, 日韓併合に関する内務会議に参加した経験や朝鮮巡察の経験あり。1927年に辞任後, 枢密院顧問官となるが, 1929~1931年に朝鮮総督として再任。1932年に首相となったが, 2・26事件で殺害される。
- 19) 有竹修二『斉藤実』時事通信社, 1958年, 63~64頁参照。
- 20) 斉藤は退官挨拶で新施政の功績を自賛した上, その後の厳しい弾圧を予兆するかのよう

- ように述べている。「固より朝鮮の統治は永年に亙る大業であるのみならず、新政以来未だ二十年に満たず、百般の施設は僅に其の緒に就いたばかりでありまして、現に着手実行中の諸計画の完成に努むべきは勿論、将来更に新なる企画経営に俟つところの事業が極めて多いのであります。之が遂行は一に今後の当局者の御尽瘁と官民の戮力協心に依ることでありますから、各位は常に眼を朝鮮統治の大局に着け、内鮮提挈して共存共栄、以て併合の目的を達せられんことを切望して巳まないであります。」朝鮮総督府『朝鮮』第152号第1月号、1928年、2～4頁。
- 21) 斉藤の親日派育成に関しては、姜東鎮『日本の朝鮮支配政策史研究』東京大学出版会、1979年、168～203頁、に詳しく論じられている。
- 22) 劉奉哲「日帝下の国民生活水準」『日帝下の民族生活史』玄音社、1982年、412頁参照。
- 23) 同437頁参照。
- 24) チョヨンスウン「初等教育」『韓国近現代教育史』韓国精神文化研究院、1995年、102頁参照。
- 25) 書堂の生徒には年齢制限がなく、地方の村落では農繁期の手伝いなど家の事情で基礎教育を受けてない中学生・高等学生の年齢層が通うことがあった。書堂の生徒の数を普通教育の範疇に入れて考えるのは少々無理があるが、本稿では教育事情の参考として取り上げてみた。
- 26) 1942年の国民学校(公立:内地人を含む)生徒数は1,701,187名、書堂生徒数が153,784名、公立中学生徒数が14,809名、公立普通学校生徒数欄なし、私立高等女子生徒数が5,269名(日本人989名)、京城帝国大学の朝鮮人生徒数が393名(対して内地人422名)となる。『朝鮮総督府統計年報』参照。
- 27) 警務局『朝鮮に於ける出版物概要』1930、1頁。
- 28) 趙容萬、「日帝下の我々の新文化運動」『日帝下の文化運動史』玄音社、1982年、114頁参照。
- 29) 同、116頁参照。
- 30) 警務局発行、1939年、3頁。
- 31) 趙容萬、前掲、118頁。
- 32) 池明観、『韓国文化史』高麗書林、1979年、389頁。
- 33) 1920 - 1925年間の内務省統計による朝鮮人の内地渡航者は486,960名で、帰還者は370,455名である。数字から生計の為の移住者層を考慮しても、社会運動や思想活動などが高潮していた日本で思想的刺激を受けた人々が自然に出現したであろうことは推察できる。
- 34) 文國柱編『朝鮮社会運動史事典』社会評論社、1981年、353頁参照。
- 35) イギヨン『新幹会の創立と社会教育運動』延世大学校、1990年、67頁。
- 36) 池明観、前掲、397頁。
- 37) 内務省警保局保安課『特高月報』1930年、74～79頁参照。
- 38) 李北満らは『プロレタリア芸術』や『戦旗』などを中心に彼等の理論闘争を行う一方、『インターナショナル』誌を発行していた産業労働調査所や戦旗社で『朝鮮問題』(李鐵岳著)を訳して刊行した。
- 39) 拙稿『反戦運動“クラルテ運動”が日本と朝鮮に与えた影響』立命館大学修士論文、1996年、26～35頁参照。拙稿「八峰・金基鎮の初期文学思想の形成 - 日本留学とKAPF結成までの動向を中心として - 」『立命館産業社会論集』第33巻第3号、97～110頁、で八峰の生い立ち及びKAPF結成までの大まかな活動が論じられている。
- 40) 武断統治下、天道教の機関誌として認可された『開闢』は、1920年6月から合計72号を発行したが、34回の発行禁止の他、停刊や罰金、発行停止を各1回受け、1926年8月に廃刊となる。その後、1934年、1946年に再刊を試みるが、続かなかった。
- 41) 金八峰「韓国文壇側面史(完)」『思想界』1956年11月号、198頁参照。影印本『思想界』第4巻、286頁参照。八峰は当時の立場を「韓国近代化に貢献した‘仁村’」の中で次のように述べている。「1923年から1945年まで私は史的唯物論を信じる社会主義思想の代表者であったわけ、日帝の時の親しい友人は殆どが社会主義者 - 階級革命の先頭の者たちであった。」『思想界』1961年2月号、218頁。

- 42) 拙稿, 前掲「八峰・金基鎮の初期文学思想の形成 - 日本留学とKAPF結成までの動向を中心として -」106 ~ 107頁参照。
- 43) 国内での機関誌発行は難しく, 1927年11月にKAPF東京支社で『芸術運動』を2号まで発行, 3号は『無産者』と改称する。当時の思想弾圧に関して李北満は「我々は抑圧されてゐる! 一人の会合しか許されず, 「マルクス」「レーニン」の文字さへ用ひることが出来ない, 合法的雑誌が, 年に八回没収され, 二回発売を禁止され, それに対する一言半句の理由を聞くことさへ出来ないまでに。我々に自由はない! 語り, 聞き, 読み, 観, 泣く自由さへが。今や我々は人間としての一切の自由が完全に剥奪されて終つて居る!」(「芸術運動の過去と現在(二)」『戦旗』創刊号, 1928年5月, 25頁)と述べている。ここで取り上げている雑誌は, 合法的に発行したが, 当局から睨まれた社会主義系の雑誌, 本文が書かれたのが1928年3月であり, 上記の内容からすれば, 1年前から発行を試み続けた雑誌と言える。即ち, KAPF機関誌の発行に関することだと推測出来よう。また李北満は1928年9月号の『戦旗』では同年7月31日付で「(略)彼等(朝鮮の労働者や農民達 筆者注)に俺達の機関紙をばら撒いてやろうとしたのだ!(中略)俺達の芝居は朝鮮に持って行く前に, 完全に打ち壊された。殆んど出るばかりになつてゐた『芸術運動』は, 発行不能になつてしまった。」(153頁)と述べている。以上から推測すると, KAPF機関誌の日本での発行もままならぬ厳しい状況であったことが窺える。
- 44) この内容は民族主義文学派との論争でも明確になっている。拙稿, 前掲『反戦運動・クラルテ運動』が日本と朝鮮に与えた影響 - アンリ・バルビュス, 小牧近江, 金基鎮を中心に』33 ~ 34頁参照。
- 45) 「文芸時評」『朝鮮之光』94頁。
- 46) 金八峰, 前掲「韓国文壇側面史(完)」199 ~ 200頁参照。影印本『思想界』第4巻, 288頁参照。
- 47) 白鐵『朝鮮新文学思潮史(現代篇)』白楊堂, 1949年, 90頁。同様の指摘は任軒永によつてもなされている。安斎育郎, 李修京編『クラルテ運動と「種蒔く人」』御茶の水書房, 2000年, 132頁参照。
- 48) 「プロレタリア大衆文学の問題」『戦旗』1928年10月号, 99頁参照。
- 49) 同, 100 ~ 104頁参照。
- 50) 『戦旗』1929年2月号, 87 ~ 96頁参照。
- 51) 八峰は通俗小説の読者を婦人, 小学生, 封建的イデオロギーを持っている老年, 青年, 農民大衆と定義している。
- 52) 「通俗小説小考(マルクス主義的通俗小説の構図)」『朝鮮日報』1928年11月9日 ~ 11月20日参照。
- 53) 「プロレタリア大衆文学の問題」99頁参照。
- 54) 金允植『韓国近代文芸批評史研究』一志社, 1993年, 79頁参照。
- 55) 同。
- 56) 『朝鮮日報』1929年1月1日 ~ 2月2日参照。
- 57) 「濁流に抗して 文芸的な時評」『朝鮮之光』86号, 89頁。
- 58) 拙稿, 前掲, 修士論文33頁参照。
- 59) 「20年代の文人達」『東亜日報』1968年6月29日。
- 60) 「僕らが歩いてきた30年」『思想界』。
- 61) 「僕の回顧録」『世代』, 『金八峰文学全集』208頁より再引用。
- 62) 同209頁参照。
- 63) 『別乾坤』1929年4月号, 97 ~ 98頁参照。
- 64) 京城高等法院検査局『思想月報』第10号所収, 1932年1月, 95 ~ 134頁参照。

付記: 本稿の執筆にあたっては, 安斎育郎先生(立命館大学)や池内靖子先生(同), 林茂先生(アジア現代史研究所)から多くの助言を頂いた。また, 病床に就いておられた小田切秀雄氏からは1930年代の貴重な資料や励ましのお手紙を頂いた。本誌を借りて, 5月24日に亡くなられた小田切秀雄先生に心から追悼の意を表したい。

## Mid-Colonial Korean Society Kim Kijin and Korean Intellectuals

Yi Soo-kyung \*

**Abstract:** This article explores the life and activity of Kim Kijin, founder of the Korean proletarian literary movement in the middle decades of the period of Japanese colonial rule. Traditionally seen as a major figure in Korean literary history, my focus is on his response to the broad dilemmas of Korea under colonialism.

When Kim returned in 1923 to Korea from his studies in Japan, the colonial administration was in the process of changing from direct military rule to a 'softer' type of government, known as 'cultural policy', following the bitter experience of the Samil (March First 1919) Movement and its suppression. Korean people were given a measure of freedom for political, cultural and literary activities. Given that measure of freedom, although it was limited in scope, many intellectuals sought to find a path towards liberation and national independence. Kim Kijin made great efforts to disseminate in Korean society the ideas of Henri Barbusse of France, Ivan Turgenev of Russia and Komaki Ohmi of Japan. He organized first the theatrical group Towolhoe, and then the literary groups PASKYULA and KAPF(Korea Artists Proletarian Federation in 1925). While engaged in these activities, he was opposed to political control over literary movements, and concentrated on trying to develop a literary method to enlighten the common people and share modern ideas and thoughts with them. During this period, the world of journalism was an area where Korean people could express views opposed to the Japanese authorities, and Kim also worked as a journalist.

Kim participated actively in debates about 'popular novels' and insisted on the necessity of a literature that could bridge the gap between intellectuals and common people. Later, however, he was appointed to an important position in journalism, and as the Sino-Japanese War became bogged down from 1937 and full-scale mobilization for war proceeded, he was forced to adopt a pro-Japanese stance.

Looking back over the career of Kim Kijin, we can see the two-fold dilemma that Korean intellectuals experienced at this time: 1), how to cope with the traditional social privilege of the intellectual and establish links with the masses, and 2), how to modernize Korean society while it remained subject to colonial rule.

From understanding this dilemma of the Korean intellectual of the early decades of this century, we can consider what relevance Kim's life might have for intellectuals in contemporary Japan.

key words: an intellectual, Samil Movement, KAPF, a journalist, proletarian literary movement

\* Part-time Lecturer in Ritsumeikan University